川柳天守閣

2025年４月号

第23回例会　2025年2月15日（土）　投句締切分

お題　「電話」

青空　選

電話一本がふたりを近づける　信子
妻の寝ころび娘との長電話　蔵内歳重
令和でもどっこい生きてる黒電話　佐野正邦
頑のガラ系自慢石頭　山野寿之
ふるさとと繋がっていた赤電話　春田敏晴
俺や俺息子疑り切る電話　松島きよみ
もしもしで解るお互いの体調　秋田あかり
電話ボックスで雨を避けたはいつの日か　浜脇蓬生
ふる里の昭和百年黒電話　山野寿之
人間の忖度をのぞく電話です　船木しげ子
よそゆきの声を電話で出すらしい　三枝なな
カケホプランお喋り姉妹無敵にし　波部珀兎
孫からの電話か詐欺師かふと迷い　加山勝久
受話器取ればハロー答える娘の彼氏　美代
俺だオレ老人だます二枚舌　平川柳

（五客）

佳5　ときめきがあった昭和の黒電話　浜知子
佳4　被災地の電話線まだ俯いて　小林満寿夫
佳3　留守電に逝った友から残る声　松谷由夏
佳2　耳元で甘く囁く詐欺電話　美代
佳1　原発の電話口から波の声　平川柳

（三才）

人　棺の母へ携帯そっと入れる父　**松島きよみ**
地　一一九かける電話に震える手　**松谷由夏**
天　テレビ電話うっかり眉を描き忘れ　**林ともこ**
軸　使い方忘れた夫がスマホ持つ　青空

（選評）

人の句

胸が詰まる句でした。
悲しさや、優しさがにじみ出ているように感じました。

地の句

私も同じ経験があります。
心は大丈夫、落ち着いてと言っているのに、
声が上ずり、手も震えていたのを思い出しました。

天の句

楽しく笑わせてもらいました。
テレビ電話は顔が写りますものね。
化粧はしていなくても、眉だけはと
常日頃思っている私です。

お題　「麗しい」

三枝なな　選

春夏秋冬わたしに晒す山河あり　秋田あかり
麗しのサブリナパンツまだ履ける　真鍋心平太
山萌えて薫る稜線里景色　武智三成
麗しい花が憎らし花粉症　春田敏晴
麗しさ自分磨きで手に入れる　青空
白寿超え日向で笑顔麗しく　蔵内歳重
女性から見ても目を惹く女形　波部珀兎
雲間より春の兆しがうるわしい　秋田あかり
今日もまた機嫌麗し酒二合　山野寿之
歩けたらこの世はもっと麗しい　真鍋心平太
春が来たスズメまでもが麗しい　佐野正邦
麗しき襟足ふれてみたくなる　浜知子

（五客）

佳5　春雨に清められてる母子像　浜脇蓬生
佳4　颯爽と舞台を照らすジェンヌ達　林ともこ
佳3　凛とした姥百合として生きる日々　平川柳
佳2　美辞麗句並べた言葉潜む裏　松谷由夏
佳1　美しく生きた証の君の声　直子

（三才）

人　麗しい人に見つけた喉仏　松谷由夏
地　産気づいちゃったとはしゃぐ花菖蒲　小林満寿夫
天　シャッキリと老いぬ背中の立ち姿　美代
軸　我もまた麗人前に言葉ずず　三枝なな

（選評）

人の句

近年　美しい男性が多くなり　男性化粧品もズラリ。
女性も負けてはおられません。
下五　喉仏でハットさせられました。

地の句

花菖蒲の花言葉は「うれしい知らせ」
出産の嬉しさか　孫誕生のうれしさか
喜びが伝わってくる句でした。

天の句

出立ち姿は老いてからでは後の祭り。
日頃から背筋を伸ばす生活を心がけたいものです。
老いへの警告　シャッキリが生きていました。

お題　「雑詠」

真鍋心平太　選

冬が逝くホットココアで締めくくる　秋田あかり
啓蟄の光求めてスニーカー　堀内きみ子
蕗の薹遠い日の恋ほろにがく　美代
屁理屈が自縛している弥縫策　岡野とら丸
意味深な言葉が残る今日の鬱　松谷由夏
柱の傷残しリフォーム里の家　松島きよみ
見せずロマンス詐欺に騙される　船木しげ子
好きな子の手前で終わるオクラホマ　波部珀兎
物価高抵抗手段粗酒粗餐　佐野正邦
回覧板はにかみながら向かいの子　三枝なな
甘言で老い誑かす電話詐欺　山野寿之
串カツ屋みんな斜めになっている　浜知子
春だなあバック"車に積むシーン　武智三成

（五客）

佳5　大声で叫んでいいよ丸い窓　直子
佳4　生き残りおんぼろろんとひとり酒　平川柳
佳3　風紋やあなたを追ってながれゆく　浜知子
佳2　これっきりそう言ったはず赤電話　小林満寿夫
佳1　悲鳴なのか軋む引き戸が代弁者　三枝なな

（三才）

人　豆腐の歯ごたえしみじみ退院日　林ともこ
地　老化した牛に群がる大烏　平川柳
天　鴨川の水に浸かっていた自転車　小林満寿夫
軸　位置についてよーい終わらずまだ走る　真鍋心平太

（選評）

人の句

退院を迎えた日には安堵、感謝、これから先の不安など様々な感慨があるものだが、それが豆腐の歯ごたえであると・・・。「しみじみ」が胸に沁みる。

地の句

雀や燕は見なくなったが、カラスだけは生き残りしかも大きい。それが老化した牛に群がるというのだ。「老いた牛」は我が身ともこの世界とも。

天の句

石川丈山は引退して詩仙堂に身を引いてから没するまで三十年、二度と鴨川を渡ることはなかったという。この自転車は丈山が乗っていた自転車だ。

お題　「寝る」

互　選

1点

目覚めから今日一日の無事祈願　井澤壽峰
寒い夜布団包まりダンゴ虫　林ともこ
年取ればいつの間にやら昼寝する　蔵内歳重
寝る時間起きる時間もまちまちだ　岩原一角
つり革を枕に朝は通勤し　加山勝久
忌々しい眠気が醒める猫の恋　堀内きみ子
添い寝した孫も春には一年生　松谷由夏
不眠症嘆きつ祖母はまた昼寝　松島きよみ
もう一度川という字で寝てる夢　真鍋心平太
人間にも欲しい冬眠するスパン　波部珀兎
大広間殿様気分大の字に　船木しげ子
ハ°ソコンも春眠の癖ついている　武智三成

2点

寝てる間に終わって欲しい内視鏡　浜脇蓬生
しあわせな寝顔天使の子が育つ　秋田あかり
孫軍団寝相まちまち夏休み　松島きよみ
風呂や寝る喋ってみても独り者　山野寿之
寝ても寝ても眠たい春がやって来る　美代
眠ってるようだと棺に語りかけ　浜脇蓬生
入れ知恵で寝た子を起こすお節介　岡野とら丸
星になるあなたの横で寝る椿　平川柳

3点

音楽会拍手で目覚めまた眠り　加山勝久
一升瓶もごろりと横に寝てしまう　浜知子
旅の宿友の鼾と関ヶ原　堀内きみ子

4点

天国や床につく度夫が言う　青空
ご寝所の蔀を上げる弦の月　小林満寿夫
まどろんでいたら百獣の王になり　真鍋心平太
不貞寝して寝言のふりで愚痴を言う　岡野とら丸

5点

寝ころんで億光年の父といる　平川柳
寝台車あすへ向かって走る夜　直子
喜寿近し寝るのも体力いると知る　佐野正邦
雪だるまべそかきながら春と寝る　山野寿之
寝たふりを知らぬサンタはお父さん　春田敏晴

6点

寝るタイミング失せて夜通し本の虫　林ともこ
座布団に寝かせた子らに支えられ　春田敏晴
ヨイトマケ寝る間も惜しむ町工場　井澤壽峰
裏窓の月が添い寝をしてくれる　浜知子

8点

よく寝たわただそれだけでうれしい日　秋田あかり

9点

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。
得点が空白のものは前行の句と同得点です。

お題　「踊る」短句

互　選

1点

二胡に乗り踊り流れる風の盆　加山勝久
唄いだす父踊りだす母　松島きよみ
乱舞フィナーレ印度のシネマ　蔵内歳重
出会い哀しも伊豆の踊子　春田敏晴
ステップ踏んで春風が来る　松谷由夏
踊るあほうの十八番で締める　三枝なな
お好み焼きの鰹の踊り　浜脇蓬生
踊るアホウに見るだけのアホ　井澤壽峰
春風纏いダンスを踊る　井澤壽峰
笑え怒るな踊れ殴るな　蔵内歳重
踊り疲れて愛見失う　直子
踊り切ったらみちのくひとり旅　小林満寿夫
盆踊りにも音頭取りいる　船木しげ子
特技ザル持ち泥鰌を掬う　美代
踊る舞台は妻の手のひら　岡野とら丸
卒寿来て踊る阿呆が見る阿呆に　加山勝久
ラストダンスは残しておいて　真鍋心平太
孫のラインに踊りだしそう　青空
風にひらひら落ち葉は踊る　東尾由子
海を踊らす鬼太鼓の狂気　小林満寿夫
ドガの踊り子星となる夢　平川柳
スマホの上で孫の手踊る　松谷由夏
見よう見真似で盆踊りの夜　林ともこ
ステップ踏んであすを探そう　直子

2点

都をどりで春の幕開け　林ともこ
妻のてのひら踊るもいいか　浜知子
会議が踊り本筋外れ　船木しげ子

4点

春の花壇にワルツが似合う　信子
無声映画で弾むチャップリン　波部珀兎
身に覚えない噂が踊る　岡野とら丸

5点

ペンペン草も踊る春の陽　波部珀兎
フォークダンスの君のぬくもり　浜知子

6点

妻の手のひら踊るのはボク　山野寿之
三味はじょんがら舞う雪おんな　山野寿之

7点

シャルウィダンス言われパニック　浜脇蓬生
優しい言葉胸踊りだす　東尾由子

8点

踊り切るまでわたしを生きる　秋田あかり
悲喜こもごもを踊る人の輪　秋田あかり

9点

炭鉱節も満月が好き　武智三成

3点

今月の投句者（２８名　敬称略　**太字の方は初投句者**）

井澤壽峰　加山勝久　蔵内歳重　春田敏晴　松島きよみ
山野寿之　岩原一角　信子　武智三成　小林満寿夫
平　川柳　三枝なな　林ともこ　岡野とら丸　真鍋心平太
秋田あかり　美代　直子　松谷由夏　青空
勘兵衛　波部珀兎　浜脇蓬生　船木しげ子
堀内きみ子　佐野正邦　東尾由子　**浜知子**

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣　連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ⑮

江戸の「古川柳」と明治の「新川柳」の世界（1）

―〈穿ち〉の短詩と〈抒情〉の短詩の比較考察―

十八世川柳宗家 閑成庵川柳　平　川柳（東京川柳会主宰）

川柳という短詩文藝の源流は「雑俳（ざつはい）」の「前句附（まえくづけ）」に由来します。「雑俳」は「俳諧の連歌」における「附合（つけあい）」から分離独立して生じ、さらに川柳はその「雑俳」から分離独立して誕生しました。

京都帝国大学教授の俳諧史の研究者である穎原退蔵（えばらたいぞう）（一八九四‐一九四八）博士の『俳諧史の研究』（星野書店、一九三三年）の「雑俳前史」によれば、「雑俳」は「前句附・冠附・沓附・五文字等俳諧から出て、さらに簡単卑俗を旨とするやうになった諸種の小詩形を、総括的に呼ぶ名称」と定義されています。これらの「雑俳」のなかで最も古く起り、「雑排」の核になっているのが「前句附」です。

さらに滋賀大学教授の宮田正信（みやたまさのぶ）博士の『付合文藝の研究』（赤尾照文堂、一九七二年）では「連歌」と「俳諧」と「雑俳」の三者を包括的総称して「付合文藝（つけあいぶんげい）」と呼び、「前句付俳諧」と「雑俳の前句付」を区別し、「雑俳を付合文藝の最終的段階」として捉えました。

宮田正信博士の『雑俳史料解題』（日本書誌学体系９０、青裳堂書店、二〇〇三年）によれば、「雑俳」は「前句付け俳諧の末流と、そこから出て、さらに多岐に分流新生して、在来の俳諧の規範の埒外（らちがい）に展開した、さまざまの新形態のものをも含めた、新生俳諧全般を包括するもの」とされ、「雑体の俳文藝」とも称する「第二の俳諧分野」とされています。

松尾芭蕉（一六四四‐一六九四）の「蕉門十哲」のひとりである森川許六の『俳諧問答』のように「雑俳」を蕉門の徒が他門に対する「蔑称」として用いた例もありますが、「俳諧」の「付合」から生じた「第二の俳諧分野」

で、「俳諧の連歌」の「発句」以外の各種の「雑体の俳文藝」として捉えるのが、妥当であると考えられます。

宮田正信の『付合文藝の研究』では「雑俳」は「連歌」や「俳諧」と共に「付合文藝」として捉えられていますが、「雑俳」は「連歌」や「俳諧」と異なり、形式と内容の両面で「連歌」や「俳諧」には見られない複雑な変化がみられます。特に「雑俳の前句付」を源流とする柄井川柳の創始した「古川柳」は「前句」である題を省いて一句にて「句意」の分かる句を収録した『誹風 柳多留』の刊行によって、「古川柳」は「独詠句」としての性格を強め、「付合文藝史」の終局的段階で「川柳風の前句付」または「川柳点前句付」と呼ばれた「古川柳」は一句独立した「独詠句」となり、のちに五世川柳によって「柳風狂句」と呼ばれましたが、明治三〇年代に井上剣花坊に代表される「新川柳」派が「狂句百年の負債を返せ」というスローガンに「狂句」という名称を払拭し、「川柳点前句付」を略して「川柳」と呼称されるようになり、現在に至っています。

江戸時代の柄井川柳が創始した「古川柳」は江戸庶民の生活や風俗を描いた庶民文藝として江戸で流行しました。一七六五（明和二）年五月に刊行された『誹風 柳多留』（初篇）には、次のような「古川柳」が収録されています。

かみなりをまねて腹がけやつとさせ

子が出来て川の字なりに寝る夫婦

役人の子はにぎにぎをよく覚え

指のない尼を笑へば笑ふのみ

「川柳中興の祖」のひとりである阪井久良岐（さかいくらき）（一八六九-一九四五）はこの「古川柳」を分析して一九〇三（明治三十六）年の『川柳梗概』で川柳の「三要素」を提唱し、翌（明治三十七）年の『川柳久良岐点』では、「おかしみ」（滑稽）「穿（うが）ち」（諷刺）「軽味」（余情）の「三要素」を明確にしました。

穎原退蔵は論文「川柳の文藝性」で「三要素」の「穿ち」が主眼であり、それ以外の「滑稽」と「軽味」は「第二義的」な特性に過ぎないと指摘しました。（続く）

「当て字」

真鍋心平太

皆さんはソ連の軍港「ウラジオストク」をどういう風に発音されるだろうか。テレビドラマの「坂の上の雲」では俳優たちは全員「ウラジオ・ストック」と発音していた。

日本と歴史的に繋がりの深い港湾都市であるが、「浦」と「塩」が連想され、ストックは在庫で何となく倉庫の立ち並ぶ港町を思い描く人も多いらしい。それに、その昔の人はこれを「浦塩斯徳」と書いた。勿論当て字である。こう書かれればどうしたってウラジオ・ストックと読んでしまうのはしがたがないが、ロシア語で正しくは「ウラジ・オストック」と区切って読む。１９６１年に打ち上げられた初の有人宇宙船が「ウォストーク（ボストーク）」と名付けられたのを覚えている方も多いと思うが。実はウラジ・オストック」のオストックも、ウォストークと読むほうが原音に近いそうである。

意味は「東方」そして「ウラジ」とは支配すること。で、つまり「ウラジ・ウォストック」は当方支配の拠点、つまり当方政策のシンボル港の意味を持っている。

ウラジオストックは一年中凍らない。北側が北極海に面し冬の間は氷に閉ざされるロシアにとって東の海に出られるウラジオストックと南の地中海に出られるウクライナは小麦や石油・天然ガスの輸出国であるロシアにとっては最重要な拠点で、ウクライナのNATO化など絶対に認めるわけにはいかないのだ。そのことを果たしてゼレンスキーは承知でウクライナのNATO化など企てたのだろうか。

ロシアの宇宙船といえばもうひとつ「スプートニク」が懐かしく思い出されるが、こちらの意味は「人生の伴侶」。地球の周りを回る宇宙船の名前としてはこちらのほうがはるかにお洒落でふさわしい。但し、地球の伴侶で居られたのは打ち上げから９２日間、最後は大気圏に突入して燃え尽きた。

第２４回　ウェブ川柳天守閣　ご案内

お題　「透明」　加山勝久　選
「一緒」　久世高鷲　選
「増える」　互　選
「雑詠」　真鍋心平太　選
「器」（短句）　互　選
（投句 各 2 句）

投句料３回につき 1000 円
（請求書メールが届いたらお支払い下さい。）

投句開始　２０２５年４月９日（水）から
投句締切　２０２５年４月 １５ 日（火）まで
互選投票　投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
４月 16 日（水）～４月 19 日（土）
披講発表　４月２０日（日）から随時閲覧可能になります。

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は下記 URL から可能です。
https://tensyukaku.com/

投句、互選投票は会員登録が必要です。
会員登録は下記 URL より
https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから

投句・閲覧　　会員登録

鉛筆＋パステル画

今月はお休みを頂きます。

二〇二五年三月二五日発行
ウェブ川柳天守閣会報
（発行責任者　真鍋心平太）
（編集人　真鍋心平太）

（事務所）
〒　520-0054
滋賀県大津市逢坂一丁目8－1
サンルシエル大津 607 号室
川柳天守閣
TEL・fax　077（532）4211
携帯　080（2672）4446